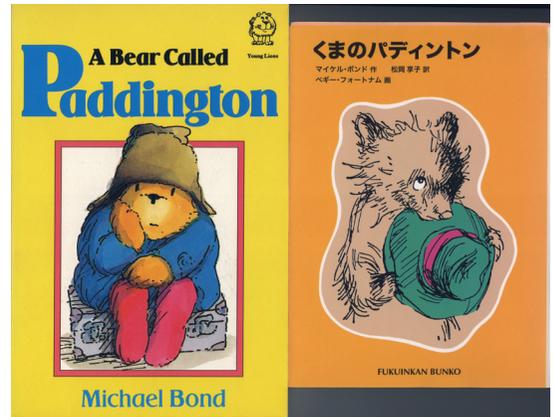


パット』といった名作がある) になったが、この時にデザインを担当したアイヴァー・ウッド(1932~2004)がその後『ロンドン・イーヴニング・ニュース』紙に四コマ漫画版パディントン連載し、また文房具などにもウッドのパディントンが使われるようになった。一般に児童文学では挿絵がその他の分野よりも重要であることから、特定の画家が特定の作品(あるいはその作家の他の作品も)の挿絵を担当し、版が改まって挿絵は変更されないことが多い。例えば『アリス』におけるジョン・テニエル、『ナルニア』のポーリン・ベインズ、『グリーン・ノウ』のピーター・ボストン、一連のロアルド・ダール作品におけるクウェンティン・ブレイクなどである。だがパディントンの場合、ブッシュ・ハットとダッフル・コートと長靴、トランクと首から下げた札という分かりやすい目印があるためか、イラストレーターが変わってもそれなりにパディントンらしく見える。最近の絵本シリーズではニック・ワードやジョン・ロバン、また米国ではR・W・アリーといった画家がパディントンを描いている。日本では現在、大垣共立銀行がパディントンをキャラクターとして使っていて、またかつては三井銀行がこの子熊を使っていた(私はその当時の預金通帳を今でも持っている)。英国では最近、マーマイトという食品のテレビCMにパディントンが出演している(パディントンだけ縫いぐるみで、他の人物と背景は絵)。マーマイトとはイースト菌から抽出された黒いジャムのようなもので、英国では普通にパンに塗布して食されるが、外国人には敬遠されることが多い。パディントンを使ったCMはこのようにマーマイトが(主に外国人から)敬遠されることを逆手に取って視聴者を笑わせよう狙ったものである。私が見たのはパディントンがマーマイトとソーセイジのサンドウィッチを作って人に食べさせるヴァージョンと、マーマイトとハムのサンドウィッチのヴァージョンだったが、他にチーズとマーマイトのヴァージョンもあるらしい。(どれもまともな組み合わせでないことをお断りしておく。)いずれのヴァージョンでも、パディントンはそれを美味そうに食べるが他の者たちは顔を顰めたり悲鳴を上げたりして、最後に‘You either love it or hate it.’のキャッチコピーが文字と音声で流れる。

ロンドンのパディントン駅にはかつてパディントンの巨大縫いぐるみが展示されていて、またパディントンのキャラクター・グッズ専門店もあったが、今はパディントンの銅像が立っている。キャラクター・グッズの店は私が知る限りパースに一軒ある。またかつては日本にも、横浜線の町田駅の改札近くにパディントン・グッズ専門店があったのだが、いつの間になくなってしまった。



左：デイヴィッド・マッキー；右：ペギー・フォートナム

日本のテレビドラマに見る 英語教師像

経営学部
安藤 聡

英語教師には奇人が多い気がする。私の恩師を思い出してみても、確かに英語担当者には良くも悪くも個性的な先生が多かった。大学時代の友人の中には現在高校や大学で英語を教えている者が多いが、そのほとんどが英語教師奇人説を裏付けるような輩ばかりである。と言っている私自身が最もそれを裏付けているという声も聞こえなくもないが、もちろん世の英語教師の中にまともな人

間もないわけではないが、それとて法則を裏付けるための例外でしかない、と言っては言い過ぎだろうか。

そう思って学校を舞台にしたテレビ「ドラマ」を見直してみると、『飛び出せ！青春』のピギンとか『ゆうひが丘の総理大臣』の「総理」とか、強烈な個性を発揮する主役クラスの教師には伝統的に英語担当者が多いようだ。たいていは留學歷（海外放浪歴と言った方がいいかも知れない）のある、日本の模範的な教師像の枠組みを大きく逸脱した自由主義的な若い男性教師である。

この種のドラマの最も古いものは『青春とはなんだ』（1965～66、日本テレビ）であろう。夏木陽介扮する野々村先生は米国帰りで、閉鎖的な田舎町の高校に赴任した。スポーツ刈りのさわやかな好青年であり、金八先生を見て育った私らの世代には至極まっとうな教師像に見えるのだが、当時としてはこれでも十分に型破りだったのであろう。英語だけでなくサッカー部の指導も行い、また成績不振に陥っている生徒に対しては他教科の面倒まで見てしまう。「先生は英語の先生なのにどうしてそんなに日本史に詳しいんですか」とその生徒に訊かれて「日本人だからなあ」と訳の分からない受け答えをする場面があったが、それなら日本史が出来ないその生徒は日本人ではないのか、と深夜の再放送を見ながら独り言を呟いた記憶がある。もちろん今冷静に考えれば、日本人として、と言うよりも人間として、未完成だからこそ「青春」なのであろうか。

『これが青春だ』（1966～67、日本テレビ）はタイトルが示すとおり、『青春とはなんだ』の後継番組である。今回は竜雷太扮する英国帰りの大岩先生が漁村の高校にふとした偶然から就任することになる。野々村先生よりは多少砕けたイメージがあるが、それでもまだ私たちの世代から見れば正統派の教師像に見える。とは言え野々村先生と同様、当時としては相当に型破りな教師像を意図して描かれていたことは明白である。生徒間に起こった問題について考えさせるのに授業をつづして英語で討論をさせるなど、多少リアリティーに欠けるところはあるが、英国帰りの特性を活かして教科指導もラグビー部の指導も的確にこなしてしまう。

『飛び出せ！青春』（1972～73、日本テレビ）

になるといよいよまっとうな教師像の枠組みを大きく逸脱するようになる。村野武範扮する河野先生は髪も長くいつもラフな服装で、いくぶん反体制的なイメージがあった。初日の授業で「Let's begin. とにかく、何かを始めよう」と大演説を行ったことから「ピギン」と綽名されるようになったが、綽名で呼ばれること自体がこれまでの野々村先生や大岩先生よりもよく言えば生徒との距離が近い、悪く言えば生徒に舐められている、ということを示している。このピギンもまたラグビー部の顧問をしているが、一方で派生語を分類して語彙を増強する指導法は悪くなかった。また、生徒を励まし奮起させるのにさり気なくテニスの詩を引用したりもする。ただし、「形式主語 It プラス to 不定詞」の構文を説明するのに、例文を板書して「簡単な構文なんだから、こんなのがわからなきゃだめだよ」などと言っていたことがあったが、これはよくないと今も思う。

『飛び出せ！青春』は『われら青春！』（1974、日本テレビ）に引き継がれる。これは同じ太陽学園を舞台にした続編で、中村雅俊がラグビー部の指導もする英語教師を演じる。これはこの時代の連続ドラマとしては比較的短命に終わる。

中村雅俊と言えばむしろこの後の『ゆうひが丘の総理大臣』（1978～79、日本テレビ）が印象的であった。今回は夕陽丘学園という別な私立高校を舞台にしている。やはり英語担当の「総理」こと大岩雄二郎先生は米国帰りらしいが、彼のアカデミックな背景はあまり物語の中に現れない。授業中の場面を見ても、英語の発音もよくないし、画期的な指導方法を持っているわけでもなさそうである。彼は初日の授業で「教室では教師の権限は絶対的なものである」と宣言し、「それじゃ総理大臣より偉いのかよ」との生徒からの野次に対して「総理大臣より上だ」と答えたことから「総理」と呼ばれるようになった。この総理はTシャツと革ジャンにジーンズがおきまりのスタイルで、ピギン以上にむさ苦しい長髪が特徴的である。そしてこのドラマがこれまでの青春学園ドラマと最も異なる点は、スポーツと関連づけられていないということだ。したがって各回のエピソードは個々の生徒の内面的な問題により焦点が当てられ、総理は生徒のために勤務時間外にもあちこちを走り回る。海辺を走っている場面がやたらに多い印象

があるのはそのためだ。総理は生徒の家庭内の問題にもかまわず首を突っ込んで行く。このドラマにはもう一人の英語教師が登場する。由美がおる扮する百田桜子先生である。桜子先生は真面目な正統派の英語教師であり、この意味で総理と著しく対照をなす。また、総理と職場のみならず私生活でもつねに行動を共にする堅物の若い数学教師大野木念先生（神田正輝）とも同様なコントラストをなし、この二組の対照の図式によって総理の奇人度がより際立つようになっているのである。このドラマは私の地元でも撮影されていた。撮影現場に遭遇したことはないが、現場を見た友人の話では中村雅俊も柴田という生徒役の井上純一もすごく背が高い人だそう。ゆうひが丘学園は多摩美術大学（東京都八王子市）、その最寄り駅は私の地元の京王相模原線京王永山駅（同多摩市）、町中の場面は京王線分倍河原駅付近（同府中市）がロケ地だった。だから私としては、総理が駅前から「ちょっと待て柴田あ！」などと言って柴田を追って駆け出し、次の場面では二人が海岸を走っている、という事実に釈然としない思いを噛み締めていた。試してみたことはないが、永山駅から走って海に行くことは多分不可能である。

『あさひが丘の大統領』（1979～80、日本テレビ）はタイトルからも分かるように『ゆうひが丘の総理大臣』のパロディとも言うべき作品である。宮内淳扮する大西先生は「反則」と絶叫されるほどに、前作の総理に輪を掛けたように型破りな英語教師である。しかし前作ほどのインパクトに欠け、このドラマはあまり印象に残っていない。

『あさひが丘の大統領』があまり印象に残っていないもう一つの理由は、同じ時期に別なチャンネルでより印象の強い学園ドラマをやっていたことであろう。『三年B組金八先生』（1979～80、TBS）がそれである。これは東京の下町の公立中学校が舞台なので、私立高校を舞台とするこれまでに述べた青春学園ドラマとは多少性質が異なる。武田鉄矢扮する坂本金八先生は坂本龍馬を信奉する国語教師である。これまでの日本テレビ系列の青春ドラマではつねに個性的な英語教師が主役であり、国語教師は比較的地味な脇役（つまり普通に考えて先生らしい先生）であることが多かったが、この金八先生は見た目も強烈でその指導方法も教育論も極めて個性的であった。だがここにも

個性的な英語教師が登場する。財津一郎扮する左右田先生である。出番は少なかったが飄々としたいいキャラクターであった。左右田先生がB組で授業をしている最中に金八先生が廊下からこっそり教室を覗こうとした場面で、それに気づいた左右田先生が「ホワット・キャン・アイ・ドゥ・フォー・ユー・ミスター・サカモト？」と声を掛け、金八先生が適当な英語を呟きながら去って行く、という場面が妙に印象に残っている。

『金八先生』の後に『一年B組新八先生』（1980、TBS）が続く。今回は岸田敏志（当時は智史。私は昔、この人に似ているとよく言われたので、また名前も同じサトシなので、今でもこの人には何となく親近感を抱いている）扮する新米英語教師新田八郎太先生が主役である。ちなみに岸田敏志は実際に教員免許を持っているらしいが、科目は英語ではなく体育だそう。この作品も金八先生と同じ桜中学を舞台にしている。新八先生はテレビドラマの英語教師にしてはまともな、真面目で地味な新人教師だった。ただ、私がこのドラマについて今でも釈然としないことは、金八先生の不在である。前作で金八先生や左右田先生は三年生を卒業させたのだから、普通に考えて次の年度には新八先生と同じ一年生の担当になっているはずである。金八先生は他校に転勤したわけではなく、桜中学にいたことになっていた。もし仮に別な学年の担当になっていたとしても、職員会議の場面にすらその姿が見あたらないのはおかしいし、大体あれだけ灰汁の強いキャラクターなのだから職員室の中でも目立つに違いないのに、私が記憶する限りこのシリーズでは一回も姿を見かけなかった。

『新八先生』の後は再び『金八先生』が始まった（1980～81、TBS）。このシリーズの英語担当は川津祐介が演じる上林先生だった。この英語教師は授業時に竹刀を携帯し、生徒に座禅や黙禱をさせたりして精神修行的な面を重視した指導を行う。あまり英語というイメージには似つかわしくないキャラクターではあるが、強烈に個性的という意味ではテレビドラマの英語教師像の王道のひとつと言えなくもない。

この後このシリーズは『二年B組仙八先生』（1981、TBS）に続く。さとう宗幸扮する仙台出身の仙八先生が主役だが、宮崎美子扮する英語教

師「安子先生」が副担任という設定だった。安子先生の授業の場面で印象に残っているのは、文脈から未知語を推測する読み方の指導方法である。当時私はもちろん、教える側の視点ではなく教わる側の視点で見ていたのだが、画期的な指導法であったという事実だけ記憶している。(具体的な内容は覚えていない。)ただしこの安子先生も、真面目な新人教師というキャラクターであり、少なくとも奇人ではなかった。なお、私は二十年以上前に宮崎美子を間近に見たことがあるが、名前の通りとても美しい人だった。今でも好きな女優の一人である。

『金八先生』の最初のシリーズで生徒役だった田原俊彦、野村義雄、近藤真彦のいわゆる「たのきんトリオ」はその後『ただいま放課後』(1980、フジテレビ)にも生徒役で出演する。今度は高校が舞台なので、桜中学を卒業した彼らが高校に進学したのちの物語、とも解釈できる。ただしロケイションは前回が東京の下町だったのに対して今回は神奈川県割と山奥だ。地方都市の郊外という設定だったのかも知れない。これは生徒の方が主役のドラマだったが、教師役として英語担当の「チョロ」(寺泉憲)と国語担当の「ドンガメ」(本田博太郎)がいた。前者はカウボーイハットを被りジープを乗り回すお調子者、後者は保守的な堅物という設定だった。ここに再び、奇抜な英語教師と真面目な国語教師という対照の図式が繰り返されている。

1990年代の学園ドラマとして、もっとも多くの人々の印象に残っているのはおそらく『高校教師』(1993、TBS)であろう。真田広之扮する羽村先生(理科担当)と桜井幸子扮する生徒との禁断の恋物語を主軸として、持田真樹扮する生徒が京本正樹扮する藤村先生(英語担当)に強姦される挿話がそこに重なる。理科教師が主役の学園ドラマも珍しいが(南こうせつ主演の『東中学三年五組』くらいしか思い出せない)、ここでは英語教師がこれまでとはまったく異なった方向の「奇人」に描かれている。藤村先生は自分が気に入った生徒をLL教室に呼び出しては強姦し、その模様をビデオ録画して収集している。ピギンや総理や反則やチョロといったいわば人畜無害な奇人とはわけが違っているのである。このドラマを見ていて気になったことは、羽村先生も藤村先生も、授業中に生徒

にビデオを見せているばかりで、ほとんど自分の言葉で授業をしていないということである。授業くらい機械に頼らず自分でやろうよ、と今も思う。この『高校教師』は十年後に新しいシリーズとして復活する(2003、TBS)。今回は藤木直人扮する難病を抱えた古賀先生(数学担当)と上戸彩(彼女もまた私の好きな女優の一人だ)扮する生徒との物語であり、藤村先生は学年主任になっている。藤村先生は前作よりはまっとうな教師になっているが、過去のある謎めいたキャラクターという設定であった。

2001年には田村正和主演の『さよなら、小津先生』という古くて新しいタイプの学園ドラマがあった。大手銀行で人員削減の対象となった小津が社会科教師としてある私立高校に赴任する。教師としての自覚は無に等しく、生徒から「小津先生」と呼ばれることさえ嫌がるほどだが、バスケットボール部の指導で意外な力を発揮する。ここで再び、スポーツを通しての教師と生徒の人間関係の確立(または回復)という、伝統的なテーマへの回帰が見られる。ただしそのプロセスは伝統的な学園ドラマにおけるそれほど単純ではない。ここに一人の個性的な英語教師が登場する。ユースケ・サンタマリア扮する「カトケン」こと加藤賢先生である。彼は一言でいえば「空回りする熱血教師」であり、本人は一生懸命なのに生徒からはまったく相手にされていない。これまでのところ、最も地に墮ちた英語教師像であると言えよう。

2008年4月から放送された『パズル』の主人公、石原さとみ(も私の好きな女優の一人だ)演ずる鮎川美沙子もまた、地に落ちた英語教師像の一例だ。見事なほどの二重人格者で、同僚の前では「清楚なお嬢様」で通しているが生徒の前ではこの上なく高圧的で、しかも英語の学力も知識も無に等しく、有名進学校の男子生徒を相手に毎回駄洒落で英単語を教えるだけである。その駄洒落をいくつかここに紹介したいと思ったのだが、にわかには思い出せない。どれも非常に馬鹿馬鹿しかったという事実だけは覚えているのだが。

ところで、これらのドラマを概観して、ひとつ気になることがある。それは、これらの英語教師たちがそれぞれの生徒に何らかの影響を与えているのが、ほとんどの場合部活動が学校外の私的な場においてであって、英語の授業を通してではな

い、ということである。正統派の英語教師（奇人であってもよい）が英語を通して生徒に人間的な影響をも与えるというドラマを、誰か英語教師歴のある脚本家、あるいは英文科出身で教職課程を取っていた脚本家が書いて、できれば英語や英語圏文化に造詣のある俳優が演じてはくれないだろうか。そもそも教師が偉そうに教師面をすることができるのは教科指導ができるからであって、生徒よりも人間的に優れているからでは決してない。だから私は、すべての教育活動は教科を通して行うべきである、と敢えて極論したい。体育以外の教科の先生には、運動部の指導なんかしている暇があったら自分の教科の勉強をしようよ、とも言いたい。もちろん、一人一人の教師を責めるつもりは毛頭なく、本当に言いたいのは学校の体勢をもっと教科中心にしましょう、ということである。現状では教師が本来なら勉強すべき時間に、部活指導ばかりでなくありとあらゆる雑務に追われていて、教科指導の基盤となる専攻分野をより深く学んで生徒にその面白さを伝えるということが出来るだけの余裕がなくなっている、ということが何よりも問題なのだ。教師が心おきなく自分の興味のある分野の勉強に専心出来るだけの時間と研究費を、本当なら学校や地方自治体、あるいは国が保障すべきなのである。そうでなければ授業は改善されないし、授業が改善されないということは学校が改善されないということであり、学校教育が改善されなければこの国に未来はない。こういう問題提起も含めて、授業で生徒と視聴者の双方を感動させられる英語教師の物語を、誰か心ある脚本家には是非書いて欲しい。視聴者にとってもドラマを見ながら英語の勉強ができるのだから一石二鳥ではないか。

フランス共和国大統領サルコジの挙げる偉人たち

法学部

田中 正人

昨（2007）年4～5月に実施されたフランス大統領選挙の途中経過については本誌17号にて紹介したが、結局、サルコジ Nicolas Sarkozy が大統領に当選した（詳しくは『法経論集』第175号掲載の拙稿を参照）。直後の下院総選挙で右翼（保守）が議会多数派を占めたことによって、2012年までの安定政権がフランスに成立した。

「メディア選挙」の様相色濃い選挙の後も、リッチなヴァカンス報道や再婚など話題に事欠くことはなかった。しかし、流産に終わりはしたが、欧州連合新条約締結に向けての欧州外交推進、憲法改正、F. ブローデルの描いた『地中海世界』の現代組織版たる地中海同盟の提唱・推進、そして近時の金融不安拡大の中での欧州レヴェルでの取りまとめやアメリカへの働きかけなど、精力的活動ぶりは一向に衰えを見せていない。

*

さて本稿では、大統領選挙戦が公式に始まる前、2007年1月14日に開催された人民運動連合UMP大会での大統領候補指名受諾演説（パリ政治研究院 IEP de Paris 卒、51歳のアンリ・ゲノ Henri Guaino がゴーストライター écrivain fantôme）を材料に彼の歴史観、政治姿勢を探ってみようと思う。

**

パリ第10大学の学生時代からUMPの前身共和国連合UDRの下部活動家であり、ついに大統領候補（そして大統領）にまで登りつめたサルコジは、まず大統領候補指名への謝辞の中で、バラデュール元首相、シラク前大統領らが「混血の私にフランスへの愛とフランス人であることの誇りを教えてくれた」と述べる。今日のフランスを築いてき